

## 太陽光発電への備えが足りない

## ジンコ、2022年太陽電池モジュール出荷量は44.5GW 産業用蓄電池も日本で販売、銭晶副会長に聞く

ジンコソーラーは、2022年の太陽電池モジュール出荷量が44.5GWとなった。日本では4年連続でシェア1位を獲得しており、同社は今後も引き続き日本向けの出荷で首位を狙う。太陽電池モジュール製品のほか、同社は日本において近年は蓄電システムの販売にも取り組んでおり、先行し販売している住宅用蓄電システムに続き、新たに産業用蓄電システムの販売も開始した。これらの製品の今後の展開などについて、同社の銭晶副会長にお話を伺った。

—2022年のグローバルでのモジュール出荷量は？

銭晶 2022年のジンコソーラーのグローバルでのパネル出荷量は44.5GWとなり、当初の計画通りの出荷量を達成できたと評価をしている。この出荷量は世界第2位で、1位との差はわずか数十MWであった。地域別で見ると、中国、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、中東向けの出荷量がとくに増加した。

—同年の日本における出荷量は？また、日本における今後の市場の見通しについてお聞かせください

銭晶 日本での出荷量は1.1GWで出荷のシェアとして占める割合は約20%となった。4年連続で日本市場のシェアトップとなり、さらに日本においてギガワットレベルの出荷を実現した唯一の企業にもなっている。日本では2023年も、引き続き5年連続となるシェア首位を目指す。

日本における産業用と住宅向けのモジュール出荷では、出荷比率が以前は7:3であったものが、2022年には6:4になり、2023年は5:5になる可能性が非常に高い。市場がN型モジュールを受け入れられること、そして住宅用市場でもN型モジュールが受け入れられることは必然と考えている。ジンコソーラーが日本でパートナーとして協業する大手代理店や大手商社などからのフィードバックもふまえて、2023年は出荷するモジュールのうち50%がN型に切り替わると見込んでおり、さらに2024年には日本が正式にN型・住宅用市場の本格的な時代に入るとも考えている。

—太陽電池モジュールのほか、蓄電システムの販売を日本においても近年注力しています。今後の戦略などについてお聞かせ下さい

銭晶 すでに日本において販売を行っている住宅用蓄電システム

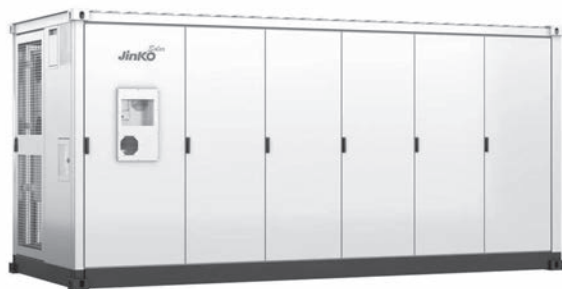
「SUNTANK」は、2022年は日本での認証の取得に取り組んできた。S-JET認証を含む一連の認証取得を完了した一方で、長期的なパートナー関係にある日本の企業とは、オフグリッドの蓄電プロジェクトに関する検討も開始している。

さらに住宅向けのSUNTANKに続いて、今年3月中旬に東京ビッグサイトで開催されたスマートエネルギーWeekの展示会では、商業用蓄電システム製品「SUNGIGA」、また大型地上発電所用蓄電システム製品「SUNTERA」も発表しており、日本にお



銭晶氏

いてこれらの蓄電システムの販売も開始した。現在日本の産業用大型蓄電システム市場では風冷式によるシステムが主流だが、ジンコソーラーが提供するシステムは液冷式を採用しており、同じ20フィートコンテナの条件下での冷却効率が高く、より多くの電力を蓄えることができ、全体的なエネルギー密度が大幅に向上する。そしてジンコソーラーの最新型の太陽電池モジュールであるTigerNeo N型モジュールと組み合わせることで、土地の利用効率を最大限に発揮することができる。ジンコソーラーは日本においてモジュール出荷量で1位を維持すると同時に、蓄電システムの出荷量も日本でトップ3に入ることを目指している(文中写真はいずれもジンコソーラー提供)。



大型地上発電所用蓄電システム製品「SUNTERA」